

同志社と自由教育

酒 井 康

新島襄が同志社において完成を期した大業は、教化と教育との渾然一体たる実現であったし、彼が日本において実現を夢みた畢生の目的は、自由教育・自治教会、この両者の併行であった。新島のキリスト教信仰は、福音主義に徹した信仰であるとともに、また彼の教会自治の思想には、在米十年を通じて彼のうちに養われた、ニューイングランドのピューリタニズム、わけでも組合派 (Congregationalism) の信仰の影響を見ることができるといえる。教会政治に関する新島の平民主義・独立自主主義 (Independent self-completeness) の思想は、同志社民主主義の信条的基盤と言ってもよいし、またこの思想は、同志社における自由教育の理念やその実践とも内的に結び合いながら、同志社教育一〇〇年の歴史を形成してきたと言いうことができる。

同志社の自由教育を考える場合、私は、新島の思想・信念に学びながら、次の三つの点に注目しなければならぬと思う。すなわち、第一は、官学に対する私学の自主独立性である。それは国家権力に支配されず、国策の手段とならぬ、教育の非権力的主体性の確立、教育自決権の樹立ということであろう。今日、私学の公共性が高唱され、国庫による私学助成が立法化されようとする動きの中で、いかにして、私学がその教育の自主性を確保し得るかは、きわめて重要な課題といわねばならない。第二は、個性尊重、個性実現の教育、彼の遺言にも見える、「倜儻不羈なる書生を圧束せず」、「其の本性に従い之を順導する」という教育である。自由教育という言葉は、一般には、この様な教育主義に当てはめて用いられる術語である。現代の高度情報化社会における教育の過密ダイヤ化の傾向に対して、また選別・差別の能力偏重主義に対して、根本的な改革の思想的拠点を同志社は新島のこの考

え方に、もういちど立ち帰って求めるべきではないだろうか。第三に、私は新島の自由教育の思想に、リベラル・アーツの教育という一面のあることを無視することはできないと思う。これは、ヨーロッパ、アメリカの大学教育を支えてきた伝統的基盤であったが、明治のわが国教育は、近代化即西歐化の途を辿りながら、この貴重な知的・精神的遺産を消化し、生かすことができなかった。わずかに、初期の東大や、後の旧制高校の教育にその片鱗を見ることができが、概してこの教育主義は富国強兵、殖産興業の国策に沿った教育体制や、今日で言えば、人的能力資源の開発に奉仕する教育体制の中では、それこそ圧束されざるを得ない。しかし、新島が同志社創立に際して構想した教育は、彼がそこに学び、深く影響されるところのあったアーモスト大学におけるごとき、自由学芸の教育、人間精神を解放するための知性訓練の教育であった。したがって、同志社が、専門教育、職業教育のための学部・学科組織を発達させながらも、つねにその校風の中に、あるいは教育の内容や質において、リベラルな性格を保有し続けているのは、新島のいわゆる「精神活力あり、真誠の自由を愛する」人物を養成せんとする人間解放の教育への強固な志向性に負うところが大きいのではないかと思う。戦後わが国の大学教育の改革は、アメリカに倣って、リベラル・アーツ・カレッジの制度的導入や一般教育の実施を通して、自由教育の精神を生かそうとしたが、いずれも十分な成功を見ていない。しかし、もしこの教育精神が開花結実すべきよき地があるとすれば、私は同志社こそ、それに適わしいと思わざるを得ない。

同志社女子大学は、共学大学と並んで、リベラル・アーツ・カレッジとして創設され、既に四半世紀の歩みが続けてきた。その間、学部・学科組織の改造もあり、大学院の新設も見たが、今後本学が女子の高等教育機関として、専門教育や学問研究の高度の発展をつねに目指しながら、同志社の自由教育の伝統を継承して、自由な主体としての人間の教育に貢献することができるとすれば、同志社女子教育の一翼を担うものとしての独自の存在意義を明らかにしていくことができると確信している。

(同志社女子大学長)